

文 學 士  
三 井 甲 之 著

消 是 消 ぬ か に

詩 集

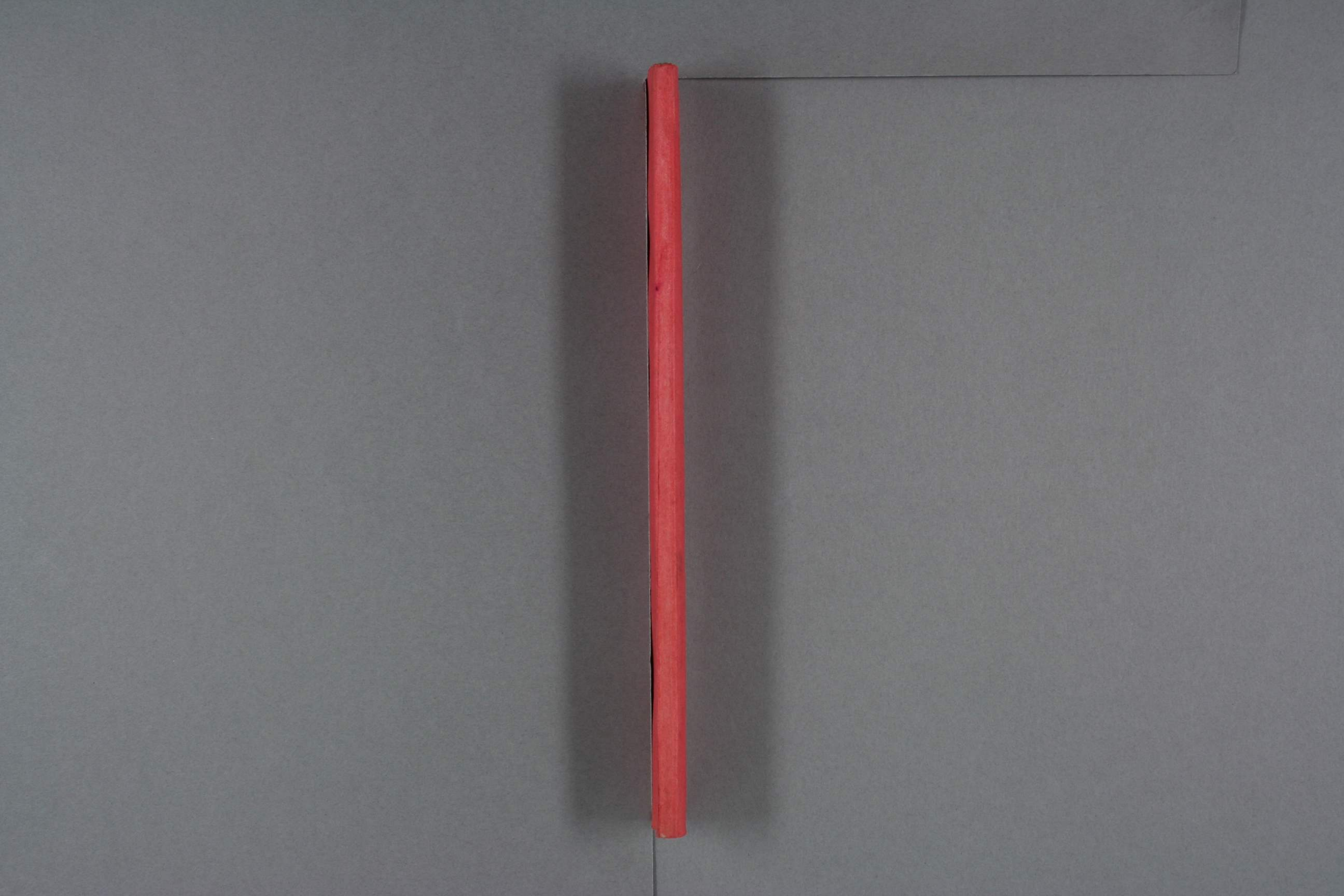
彩 雲 閣

75

70

65

60



吾等は知ること少なき故に

吾等に心より好ましきは

精神的貧者なり、殊にそが

若き少女なりせば――

――ニイチエ――

文 學 士  
三 井 甲 之 著

消 は な 消 ぬ か

詩 集

彩 雲 閣

## 序

吾人の詩は意志を出発点とし又歸着点とする強列にして深刻なる心中の動搖波瀾を情趣に直接にして弾力ある言語により緊密に表現せむとす。空漠なる感情の繪畫的記載と平凡なる理義の教訓的説明をなさむは吾人の理想にあらず。又冗漫なる技巧を弄して消閑の具たらしめむとするものに非ずして、直に實世間生活上の憂患を解脱するの力たらしめむことを期す。眞面目に人生を味

はむとする青年諸君の同情を得むことは著者の至願也。

明治四十年十一月 著 者

## 目次

●消なば消ぬかに	一
●魔 力	四
●その横顔	八
●氷る冬の夜	一〇
●小さきねたみ	一四
●かへりみ	一五
●生れしこのかた	一六
●時はいつ	一七
●若き農夫	一八
●寫 真	一九
●驚 き	二〇

- 低き聲……………二
- 初夏……………三
- 卵の花……………四
- 人の運命……………六
- 友のふみ……………六
- 夢……………九
- 藻伏束鮒……………〇
- 女の衣……………三
- にくみ難きは……………三
- 鳥小屋……………四
- 秘めたる心……………五
- 蟬……………六
- 小さき解脱……………七

- 新室……………六
- 天のみぐみ……………九
- 夕立……………〇
- 身を地に投ぐれば……………一
- 秋草……………二
- 旅僧……………三
- 名残の思……………五
- 寂寥……………六
- 地の力……………七
- 死……………八
- 墓に行く姉妹……………九

消なば消ぬかに

ともし火消ゆる一つ二つ  
車のゆきき人のどよみ  
かそけくなりゆく夜くだち  
家のつとめいまだ終らず  
短かき袖上衣よそほひ  
白きたのごひ髪にまとひ  
殊勝なるかな汝がいそしみ。  
人の手になる飾を捨て  
心の光いよよ輝く。



幸あるかな清き心は  
若子の自然をつね失はず。  
はらから來り汝が手のごひ  
取りて捨つれば黙しつ  
再び取りあげかうぶりて  
散りみだれしを整へつつ  
狭き屋内に秩序あらしむ。  
疲れし腕動かすを見て  
汝が肩に手をおき  
いとほしと吾がいへば  
もたげし面わほほゑみて

消なば消ぬかに淡雪の  
うつぶす汝を目にみれば  
差別の世忘れつ  
汝が名よべばかそけいらへ。

魔力

雲晴れて月明か  
波無き水のへ水鳥二つ  
波をつくり浮葉に泳ぐ。  
明り玉てる酒つきに  
飲めどつきせぬ泡立つうま酒  
みどりの戸張忽ちあき  
あらはる姿忽ち消ゆれば  
ふたたび満つる泡立つうま酒  
酒つきのふちあふるる思

空忽ちかき曇り  
石打つ雨の音水打つ雨の音  
木々の若葉滴る雨の音  
風さへまじり戸に打つ雨の音  
静かなるかなともし火のもと  
雨をききつつ一人立てば  
何のどよめき目には見ねど  
耳にひびき来ささやきは  
「君故ならば」と其一言  
胸のうちくりかへし

みち無き夜の迷ひの宮  
數も知らぬかけ橋を  
さまよひ渡る忽ち  
我が胸寄り來人のかけ。  
思ひに堪へずや忘れし如き  
面わをおほふ黒髪に  
目ばゆきともし火てりかがやき  
言無き思ややにどよむや  
驚くほほるみ、ありしを忘れ  
「あたまさかなりしよ」と  
くりかへし別るる

時し滅ぶもの悉

その横顔

所ところもえらばす

身みをも惜をしまず

ありのままくづほれ

集あつる思おも一ところ向むけ

身みも動うごかず

眉まゆも目めもしづまり

唇くちびる結むすべる

その横よこ顔がほ

古いにしへの神かみの工たくみが

彫えりけむ面おもわ

氷る冬の夜

氷る冬の夜  
若き血漲る  
どよむふるまひ。  
底にこもる  
深き静けき  
心よ放ちし  
疾きただずまひ。  
むらむら起り  
止まざる心を

己れと押へ  
しざれどあはれ  
向けたる其目は  
心を語るよ。  
思はず出せし  
其手にうけたる  
ま玉の光に  
「あれ」と叫び  
疊の上に  
放ち置きしを  
とりて再び

汝が胸近くに  
我が手の迫れば  
「さらば」と心を  
こめたる答。  
受けたる其玉  
いづくにをさめし。  
酔ひたる心を  
再びさまし  
何げなきさま  
心かくし  
ふるまひすれども

親はし思の  
迫り來かたみに。

小さきれたみ

清きいづみの朝のささ波  
揺れども揺れど濁らぬ水よ。  
白き花咲くうばらの刺の  
刺もいとほし白き花故。

かへり見

空立つ絲遊かけを追ひ  
身をひるがへす胡蝶の如く  
あてなきふるまひ心空し。  
我をかへり見人やあると  
胸に集る思を堪へ  
行くよあはれ運のつなぎ  
断たむ力のともしをみな子。

生れしこのかた

生れしこのかた絶えせぬ悲  
涙ははなれぬ親しき友よ。  
されどもかなし心かろく  
たのしむ花のさかりの君に  
悲わかつも吾故と思へば

時はいつ

春花咲める君がすがた  
あつきなさけも此世のさやりに  
底にかひそみし憂ひの面わ。  
この世呪ふか鏡どきまなこ。  
つよき心のむすぼれ解け  
君が笑まさむ時はいつ。



若き農夫

「何地いづちに汝なは行く  
手てに持もつ鋤くわもたゆげに  
はて無なき荒野あらのを  
何地いづちに行くゆ、汝なは」  
「心こころの行ゆくへ黄泉よみへも行ゆかむ」。

寫眞

我わがかた寫うつすしばしの間ま  
「廣ひろき世よに汝なを思おもひつつ」と  
念ねんじけむそのしばしの間ま。

驚き

清き心は春吹く風に  
つれては立ち舞ふ胡蝶の如し。  
輕げの行ひ天なる鳥の  
消えてはあらはる雲居のふるまひ。  
自然のひびきに驚き見る方  
目に入るその影心にひびき  
手を措くときの間思も迷ふ。  
迷ひのむすぼれ力ぞ生る。

低き聲

一日も十日の切なる思  
たまさか相見るうれしき今宵  
夢路たどり語らふ間なく  
過ぐるに早き樂しき時の間。  
風散る露さやけきふるまひ  
母よりならひしやまとの言葉  
清き心さながら寫し  
天なる樂をうつし身の  
情のどよみに響かす如し。

朝風いとふ薔薇の花か  
うれしき言葉堪ふるに餘る  
そぞろの心もやがてぞしづまる。  
別れの静けさ心をさめ  
歸り行く吾を戸に導き  
「雨ふり來」と低き聲。  
思にうなだれ投げたる目見  
力失せしか、あぐるともせず。

初 夏

空晴れ青葉風涼し  
輝く明かの日の光  
池にそそぐ細き流  
さざれに散る山百合花  
葉蔭涼しく明け放つ  
室内目にさやるなし。  
輕げに白き夏のよそほひ  
高嶺の空を行く雲か  
見れども君がありがたし知らず。

卯の花

しづかに流るる木かげの小河  
繁枝の卯の花廣がり咲き  
つやある若葉の光の中  
すがしき花かも星なす卯の花  
河にかけたる土橋の上  
佇む夕現か夢か  
心は君を思ひてやまず。  
白きくす花ひた咲く見れば  
驚くまなこ心空に

涼しき夕風木の葉のそよぎ  
そぞろしぬばゆ幸あれ少女子。

人の運命

木魂ぞひびく  
尾のへよ谷に  
谷よ尾のへに。  
流るる水の音  
貫き空に  
ひびく其音  
たづね迷ひ  
行く道すがら  
ともなふ死の神。

かすかに消えゆく  
其音たづね  
「吾足いたし」と  
さけぶ其聲。

友のふみ

青き巻紙あをまきがみ

友のふみとも

吾をもふ心をあこころ

くはしくしるして

「て手ふるふ」と

終りのことば。

夢

目を閉ぢうつらうつら

はかなき想ひの國のかがやき

消えてはあらはる姿見れば

小枝飛びかふ黄なる鳥。

羽つややかに身しまり

今し下枝に飛ばむとす

身のただずまひ、腹の羽は

血の色深紅に燃えむとす。

藻伏束鮒

藻に伏す魚よ。

ともしき光

寒き水。

な行き氷は

汝が身刺さむ。

藻に伏す魚よ。

底ひの波の

なごり波。

あああざやけし  
動くぞいのち。

いづちよ光

ただ一筋に

しが光

漲る光

藻伏束鮒。

女の衣

青葉冷しきある家の軒端  
うす紫の女の衣  
そよ吹く風に干されたり。  
着皺よりたる長き衣  
さらでも痛き心ひくかな。

にくみ難きは

いらだつ心は狂へる大波  
己の力に己を砕けど  
にくみ難きは汝が心はせ。



鳥小屋

葡萄の棚青葉蔭  
鳥小屋の柔藁よ  
白き卵五つ六つ  
危うげに二つの手よ  
吾手渡せし夕ぐれの庭  
目にそふ汝がその面かけ。

秘めたる心

深く秘めたる其心  
他人なきを知りけむ間  
胸の思をさながら  
ゑまひの眉引何時か忘れむ。

蟬

「蟬なく」とあがいへば  
「昨日より」と汝がいらへ。

小さき解脱

小さき鏡に我か髪けづり  
夏のよそほひ目見さへすがし。  
小さき手をあげ額をかくは  
何の幸そも小さき解脱。

新室

離れの座敷  
輝く新室  
朝の清めに  
來む汝を待つよ。

天のめぐみ

虫がなく草深き畑に立ち  
豆つまむ汝が身ずまひ。  
清き空気くま無き日光  
天のめぐみの下なる汝よ。

夕立

十日との早ひ

燃もゆるらむあつさを

流ながす夕立ゆふだち

築山つきやまゆ笥かきひゆ

庭にはに集あつまる雨水あまみづを

鍬くわとり穿うち

池いけにみちびく

いとほし洗足はだしの少女せうめ

身を地に投ぐれば

身みを地ちに投なぐれば

甘うましき思おもひ心こころに湧わく

ああその甘うましさ。

秋 草

ただ一すぢに  
ひた吹く風よ。  
亂る千花のゆらぎのうましき。

旅 僧

水は音立て流るとも  
淋し夕山、少女らが  
放りの髪をゆふ山に  
雉子も立たず淋しき山路。

木の葉踏みつつ谷行く旅人  
うたふとも聞く人あらじ、  
汝が歌を心無き  
山の空気にひびかせよ。

淋<sup>さび</sup>しきとても佛<sup>ぼつ</sup>あり。

名残の思

雲<sup>くも</sup>むらむら  
南<sup>みなみ</sup>に湧<sup>わ</sup>き  
山<sup>やま</sup>々<sup>々</sup>おほふ。  
せまき國<sup>くに</sup>内<sup>うち</sup>  
すがしき眺<sup>なが</sup>め。  
麥<sup>むぎ</sup>荊<sup>か</sup>る空<sup>そら</sup>  
雲<sup>ひばり</sup>雀<sup>り</sup>あがれり。  
ありし心<sup>こころ</sup>のどよみの名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>  
かすか動<sup>うご</sup>き夢<sup>ゆめ</sup>なる思<sup>おもひ</sup>。

寂寥

露置く草足搔き分け

さびしき小みち

一人行く。

西の山の端月落ち

さびしきまざる蛙の聲。

地の力

吾身に血流るるか

吾ながら知らず。

夜はふけわたり

時計の音のみ

耳にひびく。

わが吐く深き息

再びは吐き得ぬか。

地より身を引くあやしき力。

死

筆をとつて紙に對す  
茫乎として思無し。  
絶望か落膽か後悔か。  
一人暗中をさぐりて  
手に得る何物もなし。  
忽ち來る念——死。

墓に行く姉妹

ああ人世は悲しきかな。  
天なるめぐみを人は説けど  
この世の間はかなし其慈悲。  
人の命はうつろひかはる  
この世を去りての後にぞ生る。  
咲きみつ其花眞晝の日かけ  
移ればどよめく夕の嵐  
散る花水に流れて行くか。  
この世のおもての徒なる輝き



目ばゆき光にめぐらみ行くよ  
人のことごと悲しき世の旅  
中にまじりて行くただ一人  
若き女ぞわが足見まもり  
行くよあはれ人波のまま  
清きまなこに不安の曇  
かざしては消え再びあらはれ  
空しき努力は暗きをさぐり  
幻追ひつつかすかにほほゑむ  
ああ其ほほゑみさ迷ふ死の影  
忽ちあらはる男の姿

燃えたる心を手におさへ  
切なき思を彼女にささやく  
思ひつめたる男の心は  
童の心ただ一筋  
あとをも先をも顧みもせず  
來りし光のみなもと知らず  
ただ見る姿に心も空  
人の子孫の生慾みさかり  
手足もふるひて消えなむ其目見  
黄金の杖を右につきて  
名譽の冠額を壓し

自然しぜんを従ことわく人のたくみ  
風雨ふうう千年せんねん歴史れきしの光ひかりを  
ほこりて立たてる殿堂いでんの  
淋さびしみ漲みなぎる生いきたる其身そのみに。  
傀儡くわいらいの如ごとく運命うんめいに従したがふ  
人のたましひ石いしと化くわせしか  
よくよく見みれば木乃伊みらいぞ其男そのをとこ  
眼まなこは曇くもりぬ清すがし少女をとめの  
足あしもしどろに踏ふみこそ迷まよへ。  
何なにに酔よひたる淋さびしき其笑そのえみ。  
毒酒どくしゅに酔よひしか短みじかき命いのち

今いまぞ滅ほろびに近ちかくか  
光ひかり失うせたる面おもわのさまよ  
壁かべに畫えがきし物怪ものけの姿すがたか  
動うごくその目見まみみる目めもふるふよ。  
幼わかなき女をんなの内うちを顧かへみ  
呼よぶよ其聲そのこゑ力ちから無なけど  
ありし昔むかしの清きよく甘あまき  
響ひびきのにほひかすかに聞きゆ。  
世よの波風なみかぜに手足てあしも疲つかれ  
まなこもくらめる其親そのおや二人ふたり。  
一人ひとりの影かげはいよいよ薄うすし

其影透して森かけ見ゆ。  
其墓抜けこし地の裂目  
あはれ青き光かそも  
木末にまつはり消ゆるけぶり。  
心も絶えてうつぶす少女  
あはれなるかな此時其母  
思を傾ぶく多かる姉妹に。  
身も世も忘れてさ迷ふ其手を  
とらむとすれど力は盡きぬ。  
先だつ方に其姉一人  
まぼろし消ゆらむ眼を向け

幼きはらから救ふとすれど  
導く一歩一歩に死の國  
近づく思に立ちさまよひ  
われと吾身を顧みれば  
毒矢ぞ立てり己の胸に。  
天なるめぐみは少女を捨つるか。  
先立つ男は心のいらだち  
死の毒満ち満ち暗き池に  
ましくら向ひ人の姿  
消失せて馬の駈るが如し。  
風のままなる木末のなびき

あはれ少女は一人さまよひ  
先だち招く男のかけを  
失ふさまかな一人たゆたひ  
目に見るものはただ姉一人  
忽ちいとほし若き妹  
母の姿を見ると夢みし  
姿はかき消え冷たき地の風  
吹きすすさみ鳴るま夜中  
亡せたる父の墓邊に立ち  
今消失せむとするよあはれ  
山河の變に崩るる殿堂

人のたくみは目たたき滅び  
頼みし男は何地に今  
迷ひの心にとどめし影を  
失ひつかれて立つよあはれ  
姉は語らく「春すぎぬ」  
妹いらへて「されどと俯く  
死にゆく今はの告げざる胸に  
忽ち燃えくる不朽の命  
輝く其目見問へど答へず  
力満ちたる身をさきだて  
招くよあはれ雲の中に

明治四十年十一月二十日印刷  
明治四十年十一月廿五日發行

正價金四拾錢

著者 三井甲之

東京市神田區表神保町二番地

發行者 岡三郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 山田英二

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

發行所

振替口座  
一〇五

東京市神田區表神保町二番地

彩雲閣  
電話本局一六一八番

不許  
複製

